

### 第3章 女子補導会、女子補導団と四つの女学校

日本におけるガールガイド運動は、キリスト教主義にもとづく日本聖公会系の女学校、教会、幼稚園を中心にすすめられた。戦前の女学校としては、東京の香蘭女学校、大阪のプール学院、神戸の松蔭女子学院、さらに、イギリス聖公会から派遣された英語教師等を擁した東京女学館ではじめられている。キリスト教は明治期以降の女子教育振興の大きな要因であり、明治政府の女子教育振興との関係の推移については前章で述べた通りである。

いずれの学校もイギリス聖公会との緊密な関係を保ち、それゆえ政府のキリスト教と女子教育の関係への政策転換においては、しばしば改革をせまられつつ独自の教育活動を組織した学校でもあった。ここでは、この四つの女学校の設立経緯とスタッフ、教育観・教育内容をあとづけながら、その上で大正期にガールガイドが導入される背景について概観しておきたい。本章ではガールガイドが導入された四つの女学校の設立経緯とそこで大正期にガールガイド導入までの歴史について概観しておきたい。

#### 第1節 香蘭女学校

1858（安政5）年、日米就航通商条約が締結されると、長崎、神奈川、兵庫等が開港され、外国人居留地が設けられた。当時は日本人に対する布教活動は認められていなかったものの、その翌年（1859年）5月には中国からアメリカ聖公会のJ. リギンス、6月にはC. M. ウィリアムス（C.M.Williams）が長崎に、10月にはアメリカ長老教会のヘボン（James Curtis Hepburn）、11月にはアメリカ・オランダ改革派のブラウンとシモンズが神奈川に、フルベッキ（Guido Herman Verbeck）が長崎に来日した。彼らは初期のプロテスタント宣教師であり、当初は居留地内で礼拝を行うとともに、自ら日本語を学び、英語を希望者に教え、医療活動に従事していた。1874（明治6）年の「キリシタン禁制」の高札撤去以降、医療、社会事業、教育活動を通じた布教活動が開始される。その中に、女子教育への取り組みもあった。

イギリス国教会は1868（明治元）年にSPG(Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Part)、CMS(Church Missionary Society)のふたつの伝道教会による布教活動を開始し、1886（明治19）年に第2代主教としてE. ビカステス（Edward Bickersteth 1850－1897）を派遣した。彼はイギリスの二伝道教会とアメリカ合衆国聖公会伝道局が行っていた活動を統一し、1887年2月に日本聖公会の組織成立に寄与した。また、アンデレ伝道団と聖ヒルダ伝道団を創設し、女子教育の必要性から聖ヒルダ伝道団の事業として、日本婦人伝道師の養成、診療所開設と並んで、女学校の設立を検討した。1887年に今井寿道を初代校長として香蘭女学校（St.Hilda's School）の開設認可を行い、翌1888（明治21）4月、東京の麻布区永坂町一番地の島津忠亮邸内で開校した。開校準備には、A. C.ショー（Alexander Croft Show）、A. F. キング（Armine Francis King）、吉澤直江が協力した<sup>1</sup>。『女学雑誌』（1888年3月号）に掲載された生

徒募集広告は次の通りである。

本校は女子の教育に老練なる英国婦人及本邦人各数名を招し完全なる女学を授くるところなり今般高燥絶景なる岡上に校舎を新築し四月上旬に開校し寄宿生通学生を募集す ○本校は敢へて生徒の衆多なるを好まず欧州教育家の輿論に従ひ少数の人員を限り親切に教授すべし

開校時から E. ソントン (Elizabeth Thornton)、B. ヒックス (Braxton Hicks)、M. スノーデン (M. Snowden)、G. フィリップス (Gladys Philipps、後に日本女子大学校)をはじめとした女性宣教師が着任している。香蘭女学校は当初修業年限4年であり、開校時は生徒数7名(9月に16名)で出発した。1890(明治23)年に女子小学校を付設(1900年廃止)、1903(明治36)年には予科2年、本科6年になり、1910(明治43)年には高等科が設置された。創立以来のカリキュラム科目配当を概観すると例えば、1888年の一年時は下記の通りである<sup>2</sup>。

香蘭女学校第一年次科目配当(1888年)

	時数	修身	和漢学	英語	数学	理科	家事	唱歌	図画	体操	音楽	通計
週時			5	10	3	2	2	2	1		3	25
前期 日数	105		読書 作文 習字	読書 習字 対話	算術	地理	諸礼 裁縫 編物	単音	器具 花葉		ピヤ ノー オー ガン	7 学 科
週時			5	10	3	2	2	2	1		3	25
後期 日数	92		読書 作文 習字	読書 習字 対話	算術	地文 口授	諸礼 裁縫 編物	復音	植物		ピヤ ノー オー ガン	

概観すると当時の女学校としては、修身が時数として明記されていないこと、それに比べて英語の時間数が多いこと(週時間数の10時間は当時の最高学年である4年次まで継続する)、音楽に唱歌ではなくピアノ、オルガンと記されていることに特徴的がある。先にも述べた通り、開校当時の生徒数は7名したが、1910(明治43)年の高等科の設置時点の生徒数は100名を上回った。

1899年の高等女学校令に際しては、キリスト教主義を保持するため、各種学校の形態を継続した。1903年に学則変更が行われ、予科では英語の時間は週7時間、本科で

は週21時間の英語の教授が行われ、本科3年以上では理、地理等の教科も英語で教授された<sup>3</sup>。当時の週授業時数は、40分授業が43時であったため、半分近くはイギリス人およびアメリカ人宣教師を中心とした人々による英語とそれに関連する英国文化にふれるものであったことが推察される。1901年に創刊された機関紙『春秋の香蘭』第2号（1903）には、①「基督教主義の道徳に基き我が中流以上の女徳を涵養し其の品性を訓練陶冶する」こと、②「一学級生徒の定員を二十名内外に止め、此少数、否な教育上適度の員数を最も完全に教育訓練する」こと、③「数学科即ち幾何学代数学等の時間が多き」こと、が特色として述べられている。キリスト教主義による寄宿生、通学生による少人数の学校運営が行われており、当時の校舎も寄宿舎を含めた小規模なものであった。しかし、それまでの永坂の校舎が1910年11月に失火により焼失した。その後、海外を含めた募金活動を経て学校存続が決まり、1912（大正元）年9月、芝白金三光町に新たな校舎の落成式が行われた。イギリスからコンノート皇子（Prince Arthur of Connaught）を迎えての植樹祭が行われ、イギリス国家斉唱、聖公会セシル監督の祈祷に始まり、君が代に終わる落成式が行われた。新たに開校したこの時期、在校生は400名近くになった<sup>4</sup>。

1915（大正4）年には専門学校進学希望者のため、入学試験検定に対応したカリキュラム改革が行われた。先述したように、1903（明治36）年に専門学校令が公布され、日本女子大学校、女子英学塾等が専門学校になると、香蘭は高等女学校ではなかったために、卒業生のうちの進学希望者は検定試験に合格する必要があった。香蘭女学校でも同年に定められた文部省令第14号「専門学校入学者検定規程」を考慮する必要が生まれた。それにしたがって、香蘭女学校卒業生が高等女学校と同等以上の学力を有するという「専門学校入学者無試験検定願」を文部省に提出する必要がある、そのためには、英語の時間の大幅な削減をふくむカリキュラム改定を行なう必要があったのである<sup>5</sup>。その結果、1917（大正6）年に専門学校入学無試験についての指定を文部省から受けることになった。高等女学校への改組を行わなかったものの、聖公会系の香蘭女学校は上級学校への接続についてひとつの現実的選択を行ったことになる。改定された1915年の教育課程は下記の通りである<sup>6</sup>。

1915年香蘭女学校 学科課程表

学年	修身	国語 漢文	英語	地 歴	数 学	理 科	図 画	家 事	裁 縫	唱 歌	体 操	合計
一	3	6	6	3	2	2	—	—	3	1.5	1.5	28
二	3	6	6	3	2	2	—	—	3	1.5	1.5	28
三	3	6	6	3	2	2	—	—	3	1.5	1.5	28
四	2.5	6	6	3	2	2	—	1	3	1.5	1.5	28.5
五	2.5	5	6	2	2	2	—	3	3	1.5	1.5	28.5

（『香蘭女学校100年のあゆみ』より作成）

近代的校舎と日本の女子中等教育カリキュラムへの対応、また生徒の組織として同好会が組織され（1915年）、学校形態も整備されつつあった。時代は第一次世界大戦が終了にむかい、ロシアでは革命がおきつつある時代である。日本では第一次世界大戦後の「新しい教育の戦後秩序」を定める臨時教育会議が開催された。一方で大正デモクラシーの中で子どもの文化が注目され、一部ではあるが新しい女性の生き方が模索されつつあった。子どもたちの服装、さらに制服が洋装として制定されつつあった。このような時期、日本ではじめてのガールガイド指導者となる英国人女性グリーンストリート（Mariel Greenstreet）は1920年に香蘭に着任した。

## 第2節 プール学院

プール学院を生み出したのは、英国聖公会宣教協会（明治時代は英国国教会伝道会社 The Church Missionary Society 以下CMSと略）である。

プロテスタント各派のアメリカ人宣教師からCMSに日本宣教に関する共同アピールを受け、4000ポンドの献金による基金をもとにエンソー（G. Ensor）が長崎に派遣され、続いてエヴィントン（H. Einton）が大阪を中心に宣教をはじめた。1873（明治5）年には、ワーレン（C.F. Warren）が大阪に着任し、川口居留地で宣教の基礎を築いた。当時川口居留地とその周辺では日本政府の制限なく教会、学校、病院が開設でき、平安女学院、梅花女子学園、大阪女学院、桃山学院、信愛女学院、聖バルナバ病院、大阪川口キリスト教会、大阪聖三一教会、大阪教会がここから活動をはじめている。

1879（明治12）年にイギリスの女性宣教師であったオクスラド（M.J. Oxlad）が川口居留地の自宅に女学校（実際には少人数の私塾）を設立した。後に女子だけになり永生女学校とよばれたこの学校がプール学院の源流とされる。彼女は東洋女子教育協会（FES・Female Education Society）という当時、インド、中国などアジア諸国で女子教育を通じてキリスト教伝道を行うイギリスの宣教組織の一員でもあった。ワーレンが伝道のために建てたチャペルがオクスラドの家の裏に移築されて教室として使われた。1883年には生徒数は35名になった（うち寄宿生は19名）<sup>7</sup>。1883（明治16）年、カンタベリー大主教から日本ではじめて監督を委嘱されたA. W. プール（Bishop Arthur W. Poole）が来日し、神戸山手に居住して全国各地で宣教活動を行った。彼は、翌1884（明治17）年、聖三一神学校を開校した直後、体調をくずして離日し、英国への帰途についた。その冬をカリフォルニアにすごしたが、回復をみなま英国に戻った。その中で大阪での女性の宣教と教育活動の重要性を訴えながら1885年に亡くなった<sup>8</sup>。

洪水被害を経て、1890（明治22）年に永生女学校は聖三一教会跡地に新校舎をたてて再興された。第二代の監督であるビカステスが臨席して開校式が行われた学校は前監督にちなんで普溜（プール）女学校（The Bishop Poole Memorial Girls' School）と命名され、それまでのFESから直接CMSの経営する学校となった。プール女学校は大阪三一神学校とならびCMSの日本宣教の中心となった。CMSから婦人宣教師として派遣さ

れた教員は、初代校長をつとめたトリストラム (Tristram)、ハミルトン (L.C.Hamilton) など一部の人々を別として、プール女学校で英語や音楽を教えながら日本語をはじめとした日本文化をまなび、やがて日本各地の教会、病院、学校に赴任していくのを常としていた。プール女学校の初期の卒業生の多くは教員とともに日本各地に伝道にむかい、また牧師の夫人として宣教に献身した<sup>9</sup>。

プール女学校は学校外における宣教活動、奉仕活動において他のミッションスクールと比較しても積極的に関与していることに特徴がある。トリストラム校長は着任以来、大阪市内に6箇所の日曜学校を開き、そこで教員、さらに生徒も協力して地域の子どもたちに聖書のお話を教え、教会の伝道説教会では讃美歌の合唱を担当し、博愛社の大阪十三移転の際にも、生徒は合唱奉仕とともに卒業生のひとは孤児の母として働いた。大阪、あるいはCMSという教会の特性もあって、実践的な奉仕活動、庶民に対する社会事業に特色ある校風を見出すことができる<sup>10</sup>。また、寄宿舎には日本の各地から入学した生徒、長崎のミス・グッドオール(Eliza Goodall)の学校(十人学校)の出身者、中国、朝鮮、台湾からの留学生、海外からの帰国生も入舎してともに生活していた。

1899(明治32)年の私立学校令、高等女学校令が制定され、また文部省訓令12号に際しては、宗教教育を継続するため各種学校として認可申請を行っていた。その結果私立プール女学校、附属小学校が認可され、校内での礼拝や聖書の授業が継続可能となった。日清戦争後の日露間に緊張関係が発生し、その後の日英同盟の締結はイギリスへの好感、またイギリス国境への親近感をもたらした時期でもあった。しかし、1907(明治40)年前後から日露戦争後の不況、公立高等女学校の相次ぐ設立もあって生徒数が減少した。そこで、トリストラムは教員資格、授業内容、学校の設備と校地、器機、帳簿の改善を行った上で、「専門学校入学者検定規程」8条による高等女学校と同等の学力があるという「文部省指定プール女学校」の申請を行い、1909(明治42)年にその認可を受けた<sup>11</sup>。認可を受けた後の教科別の週時数を示すと次の通りである<sup>12</sup>。

1911年 私立プール女学校教授科目と週時数

学年	修身	国語	英語	数学	理科	地歴	裁縫	図画	家事	音楽	体操	教育	漢文	合計
一	5	5	5	2	2	3	4	1	—	1	2	—	—	30
二	5	5	5	2	2	3	4	1	—	1	2	—	—	30
三	5	5	5	2	2	3	4	1	—	1	2	—	—	30
四	5	5	5	2	2	1	4	1	2	1	2	(1)	(1)	30
五	5	5	5	2	2	—	4	1	2	1	2	(1)	(1)	30

(『明治四十四年プール女学校規則』より作成。教育、漢文は半期)

他のキリスト教主義女学校と比較して、修身の時間が明確に位置づけられていること、英語の時数が当時の高等女学校に比べれば多いものの週5時間であること、裁縫と家事の時間も他の女学校と比較して多いことがわかる。そこには、訓令12号、高等女学校令という現実の中での現実的選択をみることも出来る。もちろん、学校長みずから英語の指導を行う一方で、高等女学校に相当するべくカリキュラムが整備され、テニス、ヴァイオリン、オルガンの教授なども行われた。また、入学生徒の増加と教室不足、大阪川口地区の発展にともなう環境問題もあって、郊外の東成郡鶴橋天王寺村に土地を購入して新校舎を建設し、1917（大正6）年末に移転した<sup>13</sup>。さらに、プール女学校では、1923（大正12）に英文科を設置し、聖書、国文、英語講読、文法、作文、英国史、音声学等のカリキュラムにもとづいて授業を行ない、近隣の高等女学校卒業生を含めた生徒が学んだ。

女子教育機関としての設備充実がはかられていたこの時期に、イギリスでガールガイドを体験した女性宣教師バックス（Mabel C. Baggs）が1925（大正14）年に着任し、大阪におけるガールガイドははじめられた。

なお、プール女学校はさらなる教育改革を行って高等女学校申請を行うことになり、その結果、1929（昭和4）年に認可された。

ここでは、その週時数を示しておきたい<sup>14</sup>。

プール高等女学校の教授科目と週授業時数

学年	修身	公民	国語	外語	地歴	数学	理科	図画	家事	裁縫	音楽	体操	計
一	2	—	6	3	3	2	2	1	—	4	2	3	28
二	2	—	6	3	3	2	2	1	—	4	2	3	28
三	2	—	6	3	2	3	3	1	—	4	1	3	28
四	1	1	5	3	2	3	3	1	2	4	1	3	29
五	1	1	5	3	2	3	3	—	4	4	—	3	29

（1939『プール高等女学校規則』より作成。外語（外国語）は英語。）

### 第3節 松蔭女子学院

イギリスから派遣された二人の司祭、ヒュー＝ジェームズ＝フォス（Hugh James Foss）とプランマー（F. B. Plummer）が神戸に到着し、SPGとして神戸伝道がはじまったのは1876（明治9）年9月である。フォスは神戸山手付近に住所を定め日本語の学習と神戸在住のイギリス人のための礼拝を開始し、山手通3丁目に聖バルナバ教会を設けた。さらに彼は、1878（明治11）年、水野功、ヘンリー＝ヒューズ（Henry Hughes）の協力を得てキリスト教精神にもとづく乾行義塾という男子校を設立したが、1881年には同校の敷地内に教会を移設し聖ミカエル教会と改称した。

一方SPGでは1886（明治19）年に、インドをはじめとした非キリスト教国で女

子教育を振興する目的でLadies Association(キリスト教婦人会)が設立された<sup>15</sup>。キリスト教婦人会は1889(明治22)年に神戸で女学校を設立するために活動を開始し、それにあわせて女性宣教師ビルケンヘッド(Birkenhead)が来日した。彼女はロンドンの高等師範学校を卒業後、イギリス、南アフリカで教育・伝道活動に携わり、来日後は乾行義塾で英語、作文、裁縫、料理等を教えていた。SPGの代表者でありキリスト教婦人会から女学校設立を委嘱されていたフォスは、神戸居留地のイギリス人宣教師ウェストン(日本アルプスの命名者としても知られる)、マクレイ夫人、水野功(当時ミカエル教会執事、後神戸YMCA発起人)、三島彊(学校長を経て兵庫県学務課勤務)の協力を得て女学校設立に尽力した。また、ビルケンヘッドとともに学校を担う教員の確保を進め、望月興三郎・クニ夫妻らを招いた(興三郎は梅花女学校教頭、大阪YMCA会長を経験。クニは仙台の高等小学校、堺市立女学校教員を経験。後に神戸市立神戸幼稚園長)。校舎はキリスト教の理解者であった旧三田藩主九鬼氏の神戸市山本通の別荘を借り、ビルケンヘッドを初代校長として、1892(明治25)年1月に開校式が行われた。

神戸市内には公立女学校は設立されておらず、神戸英和学院(1875年創立、現神戸女学院)、親和女学校(1880年創立)に次ぐものである。したがって当時の神戸市内の女子が中等教育段階に進学する際には、大阪・京都の公立高等女学校に入学するか、この三校を選択することになった。松蔭女学校はSPGによるキリスト教伝道を目的としたミッションスクールであり入学者に対しては聖書を講義し礼拝を行っていたが、当時『つば美』『女学雑誌』には「家族主義」「本邦に適する女子を養成」、また「実用貞静ノ婦女ヲ養成スルコト」を教育の目的として掲げているがキリスト教教育を明記していない。この点は、キリスト教を天皇制倫理に反する宗教として排撃する風潮が生まれつつあった当時の時代状況の考慮と、生徒確保という現実的課題があった、と考えられている<sup>16</sup>。当初11人という小規模で出発した学校は第3代校長オーヴァンス(Janet Lina Ovans)が校長に就任した1896年頃から増加しはじめたため校舎増築にとりかかった。

学校開校、当初は(尋常小学校4年の後におかれた)当時の高等小学校にあたる部分2年間を予科とし、その上に本科3年間がおかれた。さらに1895(明治28)年に就業期限3年の裁縫専修科、翌1896年には本科と並列した形で修業年限2年の英語専修科と和漢文専修科が設置された。1899(明治32)年、私立学校令、高等女学校令が制定され、また文部省訓令十二号が出されたため、各種学校として認可申請を行い、12月にその認可をうけた。各種学校であるため高等女学校と異なって宗教教育、宗教儀式を自由に行うことができた反面、専門学校を始めた上級学校への入学資格を得ることはできなかった。なお、私立学校認可を受けるために、この年、予科は廃止され、本科の延長上に高等科2年間が新設された。

生徒については、初期の入学者は聖職者・教会関係者の子どもが多かったが、1902(明治35)年の日英同盟締結にともない、同盟国イギリスの学校という評判から生徒数の増加と多様な生徒の入学傾向が生じた。しかし、この明治30年代は女学校進学者その

ものの絶対数が少なく、生徒数も100名以内であったため教師を含めた親密な人間関係が維持された。加えて、校内には遠隔地からの入学者のための寄宿舎が設置され、舎監の指導と共同生活のもとで西洋文化を内面化したクリスチャンレディの養成が図られた。女性宣教師たちの人間的陶冶もあって寄宿生のほとんどはクリスチャンになったといわれている<sup>17</sup>。なお、寄宿生におけるこの傾向は、前述した香蘭女学校、プール女学院においても同様である。1906（明治39）年に新講堂が完成すると、現在の文化祭にあたる文学会の開催や同窓会を中心としたバザーも行われるようになった。1910（明治43）年の卒業式では奏楽、聖歌、イギリス国歌の斉唱、聖書の朗読の一方で君が代斉唱と教育勅語の奉読が行われており、イギリス国歌の斉唱も1941（昭和16）年の日本の対英米開戦まで継続された<sup>18</sup>。

1909（明治41）年から生徒数は急速に減少した。前年の130名から80名以下に急に減少したのである。背景には、日露戦争後の不況感、その後新設された神戸高等女学校をはじめとした学校と比較した場合、本校が専門学校の入學試験資格を受けられないという各種学校としての問題、さらに大逆事件を契機とした反キリスト教の動向などが考えられた<sup>19</sup>。当時、隣接する他校では志願生徒が急増する中での事態であり、財政的な問題もあって早急な対応を図ることが迫られた。

そこで、文部省の指定を受けるために、週時間数、年間授業時数等が高等女学校と同等であること、教師の半数以上が教員免許状を持つこと、理科室・実験器具が整備されていること、さらに高等女学校の学科目を教えるための図書、器械、器具、標本などの備品が整備されている必要があった。先述した大阪のCMSによるプール女学校が先に指定を受けていたため、学校長のトリストラムに相談をした<sup>20</sup>。その結果、教育課程として、理科、数学の充実、授業で聖書を教えていることを見直し、教員免許を持った教師を増やし、理科室を整備するなどの課題の改善に取り組み、理事者である住友彦太郎が資金援助をSPGに依頼した後、1910（明治43）年に文部省に指定申請を行った。その結果、「専門学校入学者検定規程」第八条にもとづく指定を受けたのは翌1911年のことである。さらに、公立淡路高等女学校長、川路寛堂を副校長に招請し、彼の指導の下で校舎・設備の整備を行い、また、英語時間の削減、土曜日の出校等により授業時数を改革し、1915（大正4）年2月、高等女学校としての設立認可申請が行われ、同年認可された。

同年、松蔭高等女学校は一学年40名、五学年の定員200名で発足した。その教授科目と週時数は次ページの通りである<sup>21</sup>。

この表をみると、当時の高等女学校の標準時数に比べた場合に英語の時数が二時間多いこと、また外国人教師による教授が行われ、5年生の随意科目として教育が置かれたこと、また、正規の科目以外に3年から5年生の希望者には華道と茶道が教授されたことが特色となっている<sup>22</sup>。



1915年・松蔭高等女学校の教授科目と週時間数

学年	修身	国語	英語	地歴	数学	理科	図画	家事裁縫	音楽	体操	教育	計
一	2	6	5	3	2	2	1	裁4	2	3	—	30
二	2	6	5	3	2	2	1	裁4	2	3	—	30
三	2	6	5	2	3	3	1	裁4	1	3	—	30
四	1	5	5	2	3	3	1	裁4家事2	2	3	—	30
五	1	5	5	2	3	3		裁4家事4		3	随意	30

(『松蔭女子学院百年史』および同校所蔵資料より作成)

その後、1916年から生徒数は100名を上回り、「入学競争」率も発生し、生徒数は増加した。校地、校舎を拡張整備する必要が生まれ、1922（大正11）年には財政基盤を安定させるため財団法人松蔭高等女学校が設立認可された。1921（大正10）年からはそれまで一日旅行であった修学旅行が4泊5日、遠方への移動となり、同年には日本人である浅野勇が校長となり、1925（大正14）年には洋装の制服が制定された。イギリスSPG系列、英語教育重視の経営の校風から海外在住経験をもつ保護者または富裕層の子どもが入学するようになり、「女子ミッション」としての地位を確立しつつあった時期でもある。なお、高等女学校に変化しても寄宿舎とそこでの陶冶をうける寄宿生徒は継続した。大正期末、そこで舎監をしていた上西八重、新井外子、浅野校長の妻であった浅野ソワ子らによって神戸のガールガイドは始められた。

以上、ここまで、香蘭女学校、松蔭女子学院、プール学院について明治期における学校成立の経緯、イギリス聖公会との関係、勅令12号および高等女学校令への対応を含めて概説した。ミッションスクールゆえ、政府の女子教育と宗教教育の政策変更に対して対応をせまられ、時に聖書の授業、英語の時間数をふくめて調整を余儀なくされたこと。また、女子中等教育機関への進学希望者の増加、さらに当時の女子専門学校への要望が生まれつつある時代に、学校存続という切実な状況の下で、「専門学校入学者検定指定」、さらに、各種学校から高等女学校認可申請という道を歩んだ。

かつて、寄宿生の教育を重視し、女性宣教師との生活をともにする陶冶中心であったものが、近代学校としての形態（設備、内容、方法）の整備を迫られ、結果的にミッション系女子中等教育機関としての完成を目指すことになった。この時期、1920年代は、大正自由主義と女性の社会参加について意見が交わされはじめ、もう一方では、総力戦後のさらなる国力発展と、ロシア革命対策の社会制度が模索されていた。教育制度として臨時教育会議という戦前日本の教育の枠組みが確定されつつある中で、イギリスで生まれたガールガイドは聖公会系の女学校に導入されることになるのである。

次に述べる東京女学館は上記の聖公会系の女学校ではなく、女子教育奨励会という明治期の政府・財界関係者による取り組みとして発足した学校であり、その点においては他の

3校とは異なった存在である。しかし、東京では、香蘭女学校とならんで戦前のガールガイドが活発に行われた学校のひとつであること、また、この学校の成立にあたってはイギリス聖公会の派遣した宣教師の役割が重要な位置を占めていること、先述したように明治期における欧米文化としてのキリスト教と女子教育を考えるうえで重要な存在ともいえる学校である。

#### 第4節 東京女学館

自由民権運動に対して「漸進主義」をとった明治政府は、1885（明治18）年に太政官制を廃止して内閣制度を発足させ、伊藤博文は初代内閣総理大臣に就任した。国内体制の近代的整備の一方で、条約改正が大きな課題となった。欧米的な社交の場として鹿鳴館が建設されたことに象徴されるような「欧化政策」が推進される時期がはじまる。ここでは、欧米的な教養、文化をも理解する女性の養成が求められ、そのための女子教育奨励会が発足したのは1886（明治19）年とされる<sup>23</sup>。当時、女子師範学校は教員養成を中心とした学校であり、また欧米文化について学べる学校はキリスト教系の学校が大多数であった。「鹿鳴館を中心とする社交の場が開かれると、欧米の女性に対して、わが国女性は教養が不足し、人との交際にも馴れて居らず、何かと見劣りがしてこれをなんとかしなければということが、政府要路の人達のかなりせつぱつまった思いであった。そうした条約改正を志す伊藤博文らの思いと教育の実際の場合にあって開明的女子教育の必要性を感じていた外山正一等の思いとが合致して女子教育奨励会の話が具体化することになった」<sup>24</sup>という背景が指摘されている。

伊藤博文のもとに、帝国大学総長であり当時は欧化政策を推進していた外山正一とイギリス人の J. ディクソン（帝国大学英語教授）の案が持ち込まれ、1887（明治20）年1月総理大臣官邸において女子教育奨励会の発起人会が開かれた。その結果、1、創立委員の選定 2、創立委員長の決定 3、学校の名称 4、原資金 が議題とされた。

創立委員には、伊藤博文、澁澤榮一（実業家）、岩崎彌之助（三菱合資会社）、外山正一、富田鐵之助（東京府知事・日銀）、長崎省吾（宮内省）、齋藤桃太郎（宮内省）、神田乃武（外国語学校・第一高等中学校）、末松謙澄（内務大臣）、高嶺秀夫（東京高等師範学校）、大鳥圭介（学習院・工部大学校）、原六郎（横浜正金銀行）、伊澤修二（東京音楽学校）、櫻井錠二、渡邊洪基、菊池大麓、矢田部良吉、穂積陳重（以上帝国大学）、に加えてカーギル・ノット（Cargill Knott・帝国大学）、ジェイムズ・ディクソン（James Dixon・帝国大学）、アレクサンダー・ショウ（Alexander Shaw・聖公会、英国領事館）、エドワード・ビカステス（Edward Bickersteh・聖公会監督）のイギリス人4人が加わっている<sup>25</sup>。

会長については、皇族をむかえることになり（後日、北白川宮能久親王に決まる）、伊藤が創立委員長をつとめた。名称は、「女子教育奨励会東京学館」から「東京女学館」に変更、決定された（東京を冠したのはその後各地での「女学館」設立を前提にしたものである）。

原資金は発起人会では10万円とされ、5年間で募集し財界関係の澁澤榮一、岩崎彌之

助の尽力も確認された<sup>26</sup>。

その後、校地は麹町区永田町の宮内庁管理の土地に決まり、資金募集と優秀な教員の確保がすすめられた。創立委員のメンバー、予算規模を例にとっても、当時としては「画期的」な女子教育のとりくみであったことが理解される。この間の経緯について名取多嘉雄の説明を引用したい<sup>27</sup>。

外山は、ただちに、その実現にかかり、まず、経済界の大物澁澤榮一と岩崎彌之助に相談した。二人は、外山の考えが、同種の学校を全国に数校創りたいということだったので、それらすべてを経営できる経済的母体を作った。これは華族、官吏、民間有力者から1株250円で出資を求め、それを原資として発足させたものであった。11月から始め翌年には会員178人、出資金6万円を得た。外山らはこれを「女子教育奨励会」と名付け、会長に北白川宮をいただいた。これと併行して、東京に一校を設ける準備が進んでいた。外山はポイントとなる外人教師の紹介を帝国大学の御備教師であるジェイムズ・ディクソンとカーギル・ノットという二人のスコットランド人を通じ、英国領事館付長老アレクサンダー・ショウに依頼した。ショウは英国教会派の主要な伝道協会の一つである英国福音伝播協会(S.P.G. という)所属の宣教師である。彼は、さらに、英国教会派宣教師を統括するエドワード・ビカステス (Edward Bickersteh) 監督に相談した。—中略—9月になって、ビカステスは、外山といっしょに伊藤博文と会った。伊藤は当時総理大臣兼宮内大臣であったが、欧化政策の主導者である彼は、外山のアイデアに賛同し、創立委員長を引き受けていた。席上、ビカステスは、その学校が伝道の自由を認めるなら望ましい人を世話しようと発言した。この申し出を驚くほどあっさりとして日本側が了承したので、ビカステス等は積極的に教師の獲得に乗りだした。ビカステスとショウは、英国教会の要職者すべてに、この事業が伝道にとり非常に有利であることを説いて、伝道心篤い婦人宣教師の派遣を要請する手紙を送った。これに応え、セント・ポール寺院の参事であったロバート・グレゴリー (Robert Gregory) が奔走し、11月に入って2人のベテラン教師を獲得した。年が明けてから、さらに5人が加わり、計7人の教師が得られた。

以上の経過から、東京女学館は7人のイギリス人女性スタッフによって出発している。7人の氏名、略歴、担当科目は次の通りである<sup>28</sup>。

1. カロライン・カークス (Caroline Kirkes) —校長職として迎えられる。英国で伊語、仏語、独語と音楽を修め、ロンドンで女子高等教育に10年間携わる。クラブ担当。
2. エレン・マクレー (Ellen MacRae) —教頭職。ケンブリッジ大学卒業。英国教会立女子高等学校校長9年。科学担当。
3. スーザン・バーネット (Susan Burnett)。英国で教育をうける。ロンドン大学を経てカトリック女子校教頭。絵画、音楽担当。
4. アリス・パーカー (Alice Parker) —ケンブリッジ大学卒業。英国教会立女子高等学校

(マクレーと同じ高校) 教員。歴史、英語リーダー、文法、作文担当。

5. フローラ・ブリストー (Flora Bristowe) - ロンドン大学卒業。数学担当。
6. フランシス・ダンクレー (Frances Dunkley) - ロンドンの王立音楽学校卒。音楽担当。
7. ジョアンナ・マクラウド (Joanna MacLeod) - 英国普通教育を修了。エディンバラ大学寄宿舎賄員。カークス夫人の従者。割烹指導担当。

ここにあるように、6人の教師とひとりの従者というメンバーである。学科において、国語国文学、日本史は日本人教師が担当し、世界史、外国文学、理化学、数学等はイギリス人教師が英語で授業を行った。開校当時は義務教育である小学校尋常科が四年間であったため、11歳時に入学し、予科課程1、2、3学年、本科課程4、5、6年を履修した。また、寄宿生、さらに通学生も希望すれば教師と昼食をともにした。当初は学校が小規模であったためイギリス人教師による生活面を含めた陶冶がはかられた。とりわけ寄宿生については、「寄宿生規則」<sup>29</sup>に以下のように示されている。

- 一 館内の生活は英国中等以上ノ社会ノ風ニ則ルヘシ
- 一 英国諸教師ハ可成的生徒ト密接シ之ヲシテ英国家庭ノ生活ヲ実地ニ習ハシムルヲ以テ目的トナス

この二点に端的に示されるように、イギリス人女性教師との生活によって語学の習得をはじめとした欧米の生活習慣を習得させるという目的が明らかである。宣教師でもあるイギリス人女性教師からの文化的影響、生徒との密接な接触は当然キリスト教の布教に関わる問題も含まれており、これは後日大きな問題として浮上する。

1888年の設置願いにみられる、東京女学館の教科および時間数は次の通りである。

開学当時の東京女学館本科第四年の教科および週時数<sup>30</sup>

	国語	漢学	英学	数学	家事	唱歌	音楽	図画	学術	歴史	他国語	通計
週時	2	2	8	2	2	1	1	2	2	2	1	25
一期	読書 作文 日本 歴史 中国 史等	読書	文法 作文 大家 文 文学 史 文学 史	代数 幾何 学	裁縫 割烹 看護 術	諸重 音 輪唱	洋琴	彩色	化又 は理 又は 植物 又は 生物	欧州 歴史	フランス 又はドイツ 語学・ 文学	
二期	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
三期	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

(『東京女学館百年史』および同校所蔵資料より作成。なお、修身、体操・舞踏は所定の時間外に課すとされている)

ここに示されたように、英語と外国文化を重視した教育課程であることが理解される。しかし、わずかの間に状況は一変した。先に述べたように森有礼文部大臣が打ち出した国家主義的政策によってキリスト教による教育に批判的な風潮が生まれ、福沢諭吉も一般家事教育の欠落からキリスト教系女学校を批判していた。1890(明治23)年の教育勅語を契機に、1892(明治25)年には、東京帝国大学の井上哲次郎が、キリスト教信仰は教育勅語の忠孝の精神に反し、反国家的である、との指摘を行い、「教育と宗教の衝突」とよばれる状況が生まれ、結果的に1899(明治32)年の文部省訓令第12号による学校での宗教行事の禁止となるのである。欧化主義を推進し、その中で東京女学館へのイギリス人宣教師を招聘した外山正一も、1891年(明治24年)はじめには、外国教会に教育を依存することは「有害にして亡国の策」と指摘した<sup>31</sup>。さらに、自ら設立に奔走した東京女学館のイギリス人女性教師に対しては、女子教育奨励会の事務主任の増嶋六一郎弁護士とともに「授業時間外にキリスト教の伝道を行ったことを理由に罷免」した。

1892(明治25)年の夏までに7人の女性教員は離任、また帰国した。同年9月には外山正一が教務監督に就任し、この時期以降、国語科の国分操子(1894年着任)、三輪田真佐子(1897年着任)、英語科の長谷川きた(1896着任)、数学科の富所すず(1897年着任)をはじめとした日本人教師が授業を担当するようになった。しかし、東京女学館の開学からの原則であった外国人教師の英語、音楽の指導は継続され、ランキン、メレーマーガレット・ショウ、スクワイヤ、マクドナルドが1892年以降も継続して英語・音楽の授業を担当しているのである<sup>32</sup>。当時、西欧の「貴婦人」の育成を目ざして、華族・政府関係者の女子入学を前提としていた東京女学館の入学者は、学校の経営に関わる理事者の紹介を必要としていた。しかし、日清・日露戦争の両戦役の時期に飛躍的に進んだ「富国強兵・殖産興業」の整備の中で、新興資本家層の女子入学者が増加した。雇人が人力車で「お嬢さん」を迎える姿が通常化し、当時和服ではあったがそのハイカラさが話題にのぼるようになった<sup>33</sup>。大都市東京における経済的に裕福な家庭の女子を対象とした良妻賢母校育成という位置を確立しながら、それと矛盾しない範囲で英語をはじめとした欧米の文化が受容されるようになっていったのである。なお、イギリス人女性教師の一部はキリスト教施設である平河町の聖マリア館に居住し、そこでは課外英語授業とともにバイブル・クラス、クリスマス・キャロルの授業も行われ、そこでの寄宿あるいは通学の中でキリスト教を学ぶ生徒も一部存在した<sup>34</sup>。

それでは、東京女学館の高等女学校令(1899)、専門学校令(1903)に対する対応はどうであったのだろうか。1888(明治21)年の開校以来、予科3年、本科3年という形態を基本とし、1894(明治27)年には小学科4年、高等女学科6年、専門高等科2年になり、さらに1899(明治32)年には本科5年、専門科2年の形態と

なるが高等女学校の認定を受けることはなかった。むしろ、女子教育奨励会の自負もあって、東京女学館自体がひとつの学校体系として独立したかたちをとっていた。しかし、1903年の専門学校令によって専門学校入学資格が明文化されるにしたがって、さらに専門学校入学者検定規定が改正された1924（大正13）年以降に具体的な検討が進み、1929（昭和4）年に専門学校入学者検定指定を受けることになった<sup>35</sup>。そのためには、上記のキリスト教系女学校と同様に、①有資格教員三分の二以上の配置、②理科用機械器具と図書の実、③屋外運動場の充実、に加え④財団法人組織への改変、⑤女子教育奨励会員の縁故者に対する入学について「慎重に考慮を要す」こと、が指摘された<sup>36</sup>。その結果、新しい校則から女子教育奨励会の文言はなくなり、1929年からの学科課程も下記のように高等女学校に準ずるものとされた<sup>37</sup>。

東京女学館普通科課程表 1929（昭和4）年度

	修身	国語	英語	歴史・地理	数学	理科	図画	家事	唱歌	裁縫	体操	合計
週時	2	6	6	3	3	2	1		1	3	2	29
一学年	道徳 要旨 作法	購読 作文 書取 習字	読方 訳読 習字 書取 会話	国史 本邦 地理	算術	植物	毛筆 画		単音	裁方 縫方	普通 体操 遊戯	
	2	6	6	3	3	2	1		1	3	2	29
二学年	同上	同上	同上	外国、歴史 外国、地理	同上	動物	同上		同上	同上	同上	同上
	2	6	6	2	3	2	1		1	4	2	29
三学年	同上	同上 漢文	同上 文法 作文	同上	同上 代数	生理 衛生 鉱物	同上		複音	同上	同上	同上
	2	6	6	2	2	2	1	2	1	4	2	29
四学年	道徳 要旨	同上	同上	外国、歴史 地理、概説	代数 幾何	物理	同上	衣食、住、 衛生	同上	同上	同上	同上
	2	6	6	2	2	2	1	2	1	4	2	29
五学年	同上	同上	同上	内外、現代 地理、概説	幾何	化学	同上	同上、育児 看護、経済 簿記、割烹	同上	同上	同上	同上

（『東京女学館百年史』および同校所蔵資料より作成）

上記を見ると、他の高等女学校と比較すると多いものの、本校に伝統的な英語の時間数が週6時間と削減されていること、また修身の時間が配置され、高等女学校に近い形となっている。東京女学館の場合、他のキリスト教系女学校と比較しても高等女学校令、専門学校指定への対応は遅いものであり、この学校の独自性を維持してきたともいえる。しかし、昭和初期のこの改定は、それだけ女子中等教育にとって上級学校への接続が例外なく切実な現実になっていたとも考えられる。

なお、東京女学館では明治末から大正初期に、女子補導会の発足・その背景に関わる多くの人々が女学館の教壇に立つようになった。例えば、次の人々である<sup>38</sup>。

○1910（明治43）年 ドロセア・エリザベス・トロット(Dorothea Elisabeth Trott) 英語教諭として着任。その後、神戸の松蔭女学校に一時在籍した他、マリア館に在住した。第二次世界大戦を除いて、1957年まで在籍。松蔭女学校、東京女学館の制服のデザインは、ともに彼女のアドバイスによるものである。

○1912（明治45）年、香蘭の卒業生である桧垣茂が英語教諭として着任。補導会、補導団の事務局、東京の各組を担当。

○1915（大正4年）、アミー・キャサリン・ウーレー(Army Cathleen Wooley)が英語嘱託として着任。マリア館に在住し、後香蘭に移り戦後まで勤務し、東京と全国の各組を指導。同年に東京女学館第一回卒業生の富田俊子が国語、家庭の授業を担当として着任。(富田は後に香蘭の第3代校長)。

○1916（大正5）年、マシューズ(Mathews)、英語担当として着任。後、神戸、東京在住で補導団を支援。

○1919（大正8）年、ヘイルストン、英語担当として着任。ウーレーとともに後香蘭に移り、戦後まで勤務し、東京と全国の各組を指導。

上記の中の数人はトロット、ウーレー、ヘイルストンは東京女学館のみでなく、後に香蘭、松蔭にも在籍しガールガイドを指導する人物である。そのうち、ウーレー、桧垣茂によって1923（大正12）年2月10日に東京女学館のガールガイド、東京第4組は発足した。なお、同年9月の関東大震災以降、校地がそれまでの虎ノ門から羽沢（現渋谷区広尾）の旧御料地跡に移転し、近くに存在した学習院女子部、聖心女子学院の生徒、香蘭女学校との交流もふくめて東京女学館での女子補導団活動はすすめられた。

## 小結

本章では、日本のガールガイド運動である女子補導会、補導団が初期に発足した四つの女学校について概観した。それは、日本のガールガイド運動発足の歴史的背景を具体的に理解するためである。ここでは、この四つの女学校の設立経緯とスタッフ、教育観・教育内容をあとづけた。

四つの女学校は、香蘭と松蔭がSPG系列で、プール学院はCMS系列であり、また、東京女学館は大日本女子教育奨励会という国家的な取組みから成立したが、欧米文化の受容

と教員スタッフの派遣において多くを聖公会ミッションに依存して出発している。したがって、いずれも、イギリス聖公会との緊密な関係を保ち、それゆえ当時の日本政府のキリスト教と女子教育の関係への政策転換においては、しばしば改革をせまられ、独自の教育活動を組織した学校でもあった。訓令12号、高等女学校令に対しては、当初、キリスト教主義、さらに独自の学校文化を維持するために各種学校としての学校経営を維持する方針であったが、その後、次のような改革を行った。

香蘭女学校は高等女学校への改組を行わなかったものの、1917（大正6）年に専門学校入学検定指定の認可についての指定を文部省から受けた。

プール女学校は日露戦争後の不況、公立高等女学校の設立による生徒数が減少のため、1909（明治42）年に専門学校入学検定指定の認可を受け、さらに1929（昭和4）年に高等女学校に改変された。

松蔭女学校は日露戦争後の不況と近隣の神戸高等女学校等の新設により生徒数が激減したことを機に1911（明治43）年に文部省に専門学校入学検定指定の認可を受けた。さらに、英語時間の削減、土曜日の出校等により授業時数を改革し、1915（大正4）年2月、高等女学校に改組された。

東京女学館の場合、大正期より高等科、専門科を独自に設置した学校体系を有していたが、1929（昭和4）年に専門学校入学者検定指定を受けた。

以上の専門学校入学検定指定、あるいは高等女学校への改組のためには、教職員、施設、教育課程を高等女学校に合わせたものにして申請を行う必要があった。そこでは、従来のような教育課程としての宗教活動が認められず、修身を必修として設置する必要があった。また英語を中心とした欧米文化理解にも関わる時間配当をかなり削減する必要があった。

その意味では、各校とも政府の方針に抗いながらも、現実の高等女学校、あるいは高等女学校に順ずるかたちに学校経営を変換せざるを得ない歴史があった。

註：

- 
- 1 『香蘭女学校100年のあゆみ』1988、20-23ページ。
  - 2 同前、28ページ。
  - 3 同前、39ページ。
  - 4 同前、42-43ページ。
  - 5 同前、44ページ。なお、香蘭女学校の申請書類、カリキュラム関係資料の多くは東京都公文書館に所蔵されている。
  - 6 同前。
  - 7 『プール学院の110年』1990年、2-4ページ。
  - 8 同前、12-14ページ。
  - 9 同前、26-29ページ。
  - 10 同前、28-34ページ。
  - 11 同前、40ページ。
  - 12 『明治四十四年プール女学校規則』1911年、プール学院資料室蔵。



- 
- 13 同前、50ページ。
- 14 『プール高等女学校規則』1939年、プール学院資料室蔵。
- 15 Ladies Associationは1894年にThe Women's Missionary Association(WMA)と名称を変更し、SPGの布教区で女子教育振興の活動を続けた。その後、1904年にWMAはSPGに併合されてCommittee for Women's Work(CWW)となり、資金面もSPG全体の一部となった。『松蔭女子学院百年史』1992、18-19ページ。
- 16 同前、25-26ページ。
- 17 同前、47ページ。
- 18 同前、56ページ。および松蔭女学校同窓会誌『千と勢』第4号、1910年。
- 19 同前、65-66ページ。
- 20 同前、68ページ。
- 21 同前、76ページより作成。
- 22 同前、76-77ページ。
- 23 『東京女学館百年史』1991年、21ページ。
- 24 同前、24ページ。
- 25 同前、32-33ページ。
- 26 同前、34ページ。
- 27 名取多嘉雄「英国婦人エレンマクレイと女学館」『英学史研究』第16号、1983年。
- 28 同前、および前掲『東京女学館百年史』68-72ページ。
- 29 前掲『東京女学館百年史』79-80ページ。
- 30 前掲『東京女学館百年史』87-89ページより作成。
- 31 1891年1月、『東京日日新聞』「高等中学校の存廢に関する意見」に「本邦子弟の教育を外国教会お助けの学校に委任するは非なり。有害にして亡国の策は唱うべからず」。前掲「英国婦人エレンマクレイと女学館」。
- 32 「東京女学館教職員一覧」前掲『東京女学館百年史』13ページ。
- 33 前掲『東京女学館百年史』228-233ページ。
- 34 D. E. トロット「マリア館と虎ノ門学校」(名取多嘉雄訳)『東京女学館史料』第四集、1982年、60-62ページ。
- 35 前掲『東京女学館百年史』358-362ページ。
- 36 同前、362ページ。
- 37 同前、366-367ページ。
- 38 同前、15-16ページ。